2006年12月　第58回　舞踊学会
12月３日（日）シンポジウム報告

「きみの知らないポスト・モダンダンス ——ダンス ラディカルの時代」

第一部：13：00 ～ 15：00
パネラー＝前田圭蔵（株・カンパセーション代表プロデューサー）
武藤大祐（東京大学大学院，舞踊評論）
司　　会＝榎本了壱（株・アタマトテ・インターナショナル代表，京都造形芸術大学教授）
進　　行＝國吉和子（早稲田大学）

今回のシンポジウムでは，1960年代から70年代のアメリカ，ニューヨークを中心として興り，世界の現代舞踊に大きな影響を与えた，ポスト・モダンダンスをとりあげた。この時期はダンスのみならず芸術全体が大きな転換期を迎えた時期でもあり，ポストモダンの視点は，前世紀モダニズムの批判として，現代まで続く芸術状況を牽引した力の支点に位置するといっても過言ではない。今年（2006年）のトリシャ・ブラウン来日公演実現をきっかけとして，にわかにポスト・モダンダンス再考の兆しが見られるようになった。

タイトルに示したとおり，現在，コンテンポラリーダンスを享受する人々の多くは，もはやポスト・モダンダンスを実際に見たことのない世代となったとはいえ，およそ40年前に行なわれた様々な試みを今，改めて照射することによって，現代のダンスの可能性を考えてゆこうとする機運が生じていることは確かである。特に今回は，ポスト・モダンダンスが日本ではどのように受けとめられたか，その後のコンテンポラリーダンスとどのような関連が考えられるか等について意見を交わす初めての場となった。

パネラーには若い世代を代表して前田，武藤両氏をお願いした。前田氏は，1980年代初頭からダンスに出会い，その後プロデューサーとして海外のダンスカンパニーの招聘を手がけてこられた。欧米の最新の傾向をご報告いただくとともに，ポスト・モダンダンスのヨーロッパ諸国への影響と，ローザスをはじめとするヌーベル・ダンスからコンテンポラリーダンスに至る展開について所感を交えながら，お話しいただいた。一方，舞踊研究・評論の武藤大祐氏は1990年代半ばからダンスに興味を持たれ，特にポスト・モダンダンスに関しては2000年以降から調査研究をされている。ニューヨーク留学中はもっぱら映像資料で当時の舞台に触れ，2006年に帰国されたばかりである。司会をお願いした榎本了壱氏が唯一，日本におけるポスト・モダンダンスの舞台を実際にご覧になった世代となるが，ダンスのみならず当時のアート全般にわたる広い知識を背景としたご意見をいただいた。

シンポジウムは先ず，1975年に初めてニューヨークのポスト・モダンダンスが日本に紹介された公演「Dance today 75」（1975年12月パルコ劇場，東京，企画＝厚木凡人）より抜粋されたGrand Union出演シーンの記録映像をみることから始められた。ポスト・モダンダンスという呼名がM.カービーによって命名された同年に，すでに日本に紹介されていたわけだが，この時期は1962年～67年ニューヨークのジャドソン教会を拠点とした初期の時代は過ぎ，1970年からスタートしたグランド・ユニオンの末期にあたる。アメリカのダンス研究ではジャドソン教会派とそれ以後に登場したさらに新しいグループは区別して語られるが，日本ではどちらも一括してポスト・モダンダンスとして認識されていること，さらにカービーによる定義からは，ポスト・モダンダンスが当時のポスト・モダニズムを意識して付けられた呼称かどうかは疑問であること，従ってポストモダニズムとポスト・モダンダンスは区別して考えるべきだとの指摘（武藤）があった。確かに，他の芸術たとえば建築や絵画では，モダニズムとポスト・モダニズムはわかり易く区別されて認識されているが，ダンスではカービーの定義をうけて改めて定義した小林進によるものをみても，ミニマルな動作，技術よりコンセプトの重視，即興性，遊戯性の指摘など動きの特徴がもっぱら指摘されている（榎本）。

現在，コンテンポラリーダンスの中には，一見ポスト・モダンダンスが示していたような特徴を見ることのできる舞台があるが，モダンダンスの存在を意識して考えられた動きではないわけで，これは当時と異なるところ。当時は反体制の流れがあって，対抗する対象がはっきりしていたが，現在では反体制の身振りをすることがかえって，体制に貢献することになってしまっている（武藤）。1960年代は芸術でも身体に対する意識が変ってきた時代だったということも背景にあり，ダンスは完成したまとまりの良い，ダンシーな作品というよりも，むしろ動きのもとの身体に対する興味や疑問が表面化してきた時代といえるのではないか，だから自分の身体に立ち戻るというスタンスが出てきた（國吉）。そうした傾向は美術では早い時期からみられ，ハプニングなど時代を象徴する表現になったが，20年も経つとその意識は心理的，病気のようなものを表わす傾向に陥っていった。ダンスでも同様のことがいえるのではないか（榎本）。でも，例えば現在，ヨーロッパではポスト・モダンダンスの再評価が盛んに行な

われているが，グループのなかには実際に当時のニューヨークのポスト・モダンダンスを再現するような作業をとおして，確実に自分の作品の転機としている振付家がいる。そこで問われている点は，表現の主体・客体の認識，身体の部位がどれだけ統一されているのかなど問題であり，このあたりにかつてのポスト・モダンダンスと現在のコンテンポラリーダンスの問題意識が重なるところなのではないだろうか（武藤）。

5年程前，フランスのモンペリエ・ダンス・フェスティバルで開かれたシンポジウムでは，パネラーにジェローム・ベル，アラン・ビュファール，ボリス・シャルマッツらが参加したのだが，1970年代のアメリカのポスト・モダンダンスとM．カニングハムが大きく取り上げられていた。1960年代にはP．バウシュ，1980年代初頭にはローザスのアンヌ・テレサ＝ドゥ・ケースマイケルらがニューヨークのダンス・シーンに身を置き，トリシャ・ブラウンやルシンダ・チャイルズらからのさまざまな影響をうけている（前田）。

M．カニングハムは1964年に初来日しているが，その頃すでに彼のカンパニーの若手からは批判が起こっていた（榎本），という見解に対して，T．ブラウンは当時，とにかく自由に活動できる場を求めて，ジャドソン教会派に加わり，ダンス創作上の基本的な意味を追求し，その流れの中でS．フォルティやA．ハルプリンとの出会いがあった（前田）。お互いの関連については，やはりJ．ケージの存在は大きく，彼のチャンスオペレーションをダンスに適応したのがカニングハムであり，一方，ダンスと名づけられる前のピュアーな身体を取り戻そうとしたのがA．ハルプリンといえるのではないか。そして，西海岸のヒッピー的なメンタリティーがモダニズム的な先行する世代のアートに対するコンテキストと融合したのがジャドソン派だったといえるのではないだろうか（武藤）。

以上が当日話し合われた概要だが，当初目標としていたポスト・モダンダンスと日本のコンテンポラリーダンスとの関係について，具体的なディスカッションに入るためには時間が足りなかった。しかし，これまでポスト・モダンダンスとして了解されていた事柄には訂正すべきところが指摘されたこと，また，今回の話し合いによって，1960年代にポスト・モダンダンスが試みたこと，提起した問題が，現在のダンスシーンにとって検証すべき示唆深い領域であることを確認できたことは，今回のシンポジウムの成果であった。

第二部：15：00～16：30
ゲ ス ト＝厚木凡人（舞踊家）
司　　会＝國吉和子

第一部に引き続いて，ゲストとの対談形式で行なわれた。厚木氏は伊藤道郎，石井みどりに師事，舞踊家，振付家として1960年代にデビュー，1966年から2年間ニューヨークに留学した後，1970年代「噛む」「裂記号シリーズ」等発表，日本のポスト・モダンダンスの先端となる活動を展開された。先ずはフルブライト留学当時のお話を発端に，アメリカで見聞，吸収されたもの，さらに帰国後に発表された諸作品について記録映像を試写しながらお話しいただいた。

当時ニューヨークではT．ブラウン，S．フォルティらジャドソン教会を中心とするニューダンスと呼ばれた人々が活躍していたが，彼らの試みをまさに全身で体験した厚木氏は，それまで体得したバレエを基盤とした技術とは正反対の考え方に出会い，たいへんな衝撃を受けた。と同時に，身体という素材と真っ向から対峙することの魅力に開眼されたという。肉体を砂のような物質と等価に意識させてしまう「裂記号」(1975)，単純な一連の動きを過酷に反復させた「裂記号2」(「Dance today 75」上演作品，1975)，反復しながら動きの緩急やアクセントの変化を試みた「立つ」(NHK番組)，10の動きをさまざまに組み合わせを変えてダンスを創った「10モーションズ」(1980)，ダンサーに鏡を持たせ鏡面に写る像と客席，周囲のスペースとの関係だけで作られた「Distance」(1977) の映像を鑑賞した。情緒やイメージの介入を絶ち，ダンサーの肉体に物理的な制限を課すことによって開かれる肉体の諸相は，極めてテンションの高い時空間を創りだしている。フレーズの反復は特にミニマリズムを意識したわけではなく，また，床に対する動きの多用も単に動きそれ自体が要求したものであって意味があるわけでない。このような厚木氏の方法論を，舞踊評論家の故市川雅は「肉体の空無化」と呼び，ほとんど同時期に日本に登場した暗黒舞踏の土方巽と対照させ，日本におけるポスト・モダンダンスとして位置づけている。また，肉体を空無化するにせよ，日常的なゆるい身体，あるいはタスクをこなす作業する身体にせよ，ダンスに対するダンサーのセンス，優れた資質がもっとも問われることだと厚木氏が断言されたことは興味深かった。

最後に，今回のシンポジウムのために「Dance today 75」(東京，パルコ劇場公演) の記録映像の一部コピーを許可してくださった同作品の出演者ならびにニューヨーク市立図書館ダンスコレクションに感謝します。

（以上　報告：國吉）